



19世紀イギリス労働貴族研究再考

中山, 章

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 3(2):177-201

(Issue Date)

1996-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000224>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000224>



19世紀イギリス労働貴族研究再考

中山 章

The Studies on Nineteenth-century British Labour Aristocracy Reconsidered

Akira Nakayama

19世紀イギリス労働貴族（この場合の19世紀は1850年代から1914年までとする）に関する初めての実証的な本格的な研究は、E. J. ホブズボウムの1954年の論文「19世紀ブリテンにおける労働貴族」であって⁽¹⁾この研究はブリテンを単一の対象とする経済的分析を特徴とするものであった。しかしその後しばらくはこのテーマに関する研究は全くなされることはなかった。ところが1960年から80年代初めにかけて、このテーマに関する研究と批判⁽²⁾が比較的多く公刊された。それらは研究対象をブリテンの特定の地域に設定し、経済的のみならず、文化的・イデオロギー的分析を展開し、19世紀イギリス労働史研究における労働貴族概念の重要性を説くものと、その労働貴族概念を否定するものであった。だがこうした研究と批判の展開を通じて、19世紀イギリスにおける労働者階級はホモジーニアスな存在ではなく、ヘテロジーニアスな存在であるという認識が深められ、特にその労働者階級の上層を形成したと考えられた当時アーティザンartisansといわれた熟練労働者に関する理解が深化された。しかしこの約20年間にわたる19世紀イギリス労働貴族に関する研究と批判では、一定の共通理解は得られず、その論争はさしあたって終息したかに見えた。

ところが80年代初め以来約10年間の研究と批判の空白を経て、1994年トゥレヴァ・ルミスの『労働貴族1851-1914年』が刊行された⁽³⁾。この研究は、その表題だけからでは、19世紀イギリス労働貴族の肯定的研究のように思われそうだが、しかしそれは従来のイギリス労働貴族研究、とりわけホブズボウムのそれを全面的に批判し、イギリス労働史研究における労働貴族論に代る、従来の批判にはあまりみられなかった新しい概念を提示している。しかもそれは、従来の19世紀イギリス労働貴族研究を再度見直すことが必要であることを強く迫る研究であると評価できるものと考えられる。そこでこの小論では、このルミスの研究内容をできるだけ詳細に紹介しながら、従来の19世紀イギリス労働貴族研究を再検討してみることにする。

その再検討にあたっては、このルミスの研究が従来の19世紀イギリス労働貴族研究の批判であるので、まずその従来の研究を概略的にみておくことが必要であろうが、しかしそのまえに、レーニンによる労働貴族理解⁽⁴⁾と従来からの19世紀イギリス労働貴族研究との関係を簡単に検討しておかねばなるまい。というのは、確かにルミスが労働貴族論を批判するさいに取り上げている重要な研究はホブズボウム⁽⁵⁾、J. フォスター⁽⁶⁾、R. Q. グレイ⁽⁷⁾そしてG. クロシック⁽⁸⁾によってなされ、かられはいずれもマルクス主義史家であり、そして例えばH. ペリングはホブズボウムの前掲論文を批判し

たさいに、たとえ労働貴族という用語が非マルクス主義著述家によって広く用いられていたにしても、それは「マルクス主義著述家によるその使用からその重要性を引き出している」、と述べている⁽⁹⁾からである。またルミスもここで取り上げる研究で次のようにいっている。「労働貴族の理論はマルクス主義歴史家と非マルクス主義歴史家の両者によって用いられてきたがゆえに、それはひとつのイデオロギー的パースペクティブをもつ偏向した理解として放逐されることはできない。しかしこの問題に関する現在のいかなる議論も、ホブズボウムが、歴史研究が展開されてきたさいの最も権威ある論拠をつくりだすことによって労働貴族概念のマルクス主義的解釈に実質を与えた。かれの1954年の独創性に富んだ論文を認知すること（……）によって始めなければならない」。だいたい19世紀イギリス労働貴族研究に対する批判では、労働貴族概念はすぐれてマルクス主義的であるということが強調されてきているのである。

そしてマルクス主義的労働貴族論はつとにレーニンによって定式化されてきたという認識が、今日でも一般に流布されている。そこでその労働貴族論を簡単に紹介しておくと、次のようになる。すなわち、帝国主義諸国は他民族抑圧によって超過利潤を獲得し、その一部で自国のプロレタリアートの一部を買収してブルジョア化し、こうしてブルジョア化された労働者が労働貴族であって、その階層は、「その生活様式、その稼ぎ高、その世界観の点で全く小市民的であって」、それは「労働運動内部におけるブルジョアジーの真の手先であり、資本家階級へ労働者手代（……）であり、改良主義と排外主義の真の伝達者」であるがゆえに、「ブルジョアジーの主要な社会的支柱」である。つまり労働貴族層が形成されることによって、労働者階級は全体として改良主義と排外主義に埋没し、社会変革の役割を果たすことができなくなり、ブルジョアジーによるプロレタリアートの支配は安定化するのである。そしてイギリスでは、19世紀中頃から帝国主義の2大特徴、すなわち膨大な植民地領土と世界市場における独占的地位が存在していたので、その頃から労働貴族層が形成されてきたというのである。

以上のようにみてくると、19世紀労働貴族研究はレーニンの労働貴族概念に基づいて展開されてきたという印象が生じてくることになる。事実ルミスは、ホブズボウムは少なくとも経済的にはレーニンの労働貴族論を引きついでいると認識している。しかしホブズボウムの1970年の論文「レーニンと労働貴族」はレーニンの労働貴族概念を批判した論文であり、そしてかれの1979年の「労働貴族を論ずる」という論文では、今日のほとんどのマルクス主義歴史家は、フォスターを主要な例外として、レーニンの労働貴族論を受け入れていない、といわれている。以下このことを念頭において、ルミスが批判した労働貴族研究をみてみることにしよう。

(1)

ホブズボウムは「労働貴族層というものの内容」について、「理論的には少なくとも」以下の「6つの異なる要素が考えられるべきである」、と述べている。すなわち、「第1に労働者の収入の高さとその規則性、第2に社会保障についてのかれらの見通し、第3に職長および雇用主より受ける待遇の方法を含めたかれの労働条件、第4にかれの上下の社会階層との関係、第5にかれの一般的な生活条件、最後に将来の昇進についての見通し、およびかれの子供たちの見通しである」。そしてかれは「これらのうち第一のものが比較にならぬほど最も重要である」、そして「高い規則的な賃金を得ていた者はまた、救貧法を受けずにすみ、雇用者からある程度の敬意をもって処遇され、そしてかれらの仕事においてある程度の選択の自由をもち、かれらの子供たちに比較的良好な教育の機会を与えるなどのことをするに十分な貯えをもった者である」、と述べている。そのうえでかれは、労働貴族は「専門的に熟練労働者または手工職人と規定されうるすべての労働者を含んではいなかった」、とし

て、労働貴族がいわゆる熟練労働者のある部分から成っていることを示唆している。しかしまたかれは次のように論じている。「労働貴族のモデル、あるいは理想型は、徒弟制によってその熟練職業を修得し、熟練職業をもたず、訓練もされていない不熟練労働者から区別される工業化以前の熟練手工職人のそれである」。しかし旧熟練職業が高級品を生産するグループと、限定された仕事を遂行するのに必要なより特殊化された種々の熟練への古い万能熟練の細分化によって安価な商品を大量に生産するグループとに分解された場合には、この熟練の細分化を蒙ったアーティザンは、アーティザンとしての賃金や境遇を維持できなければ、アーティザンとしての地位を失った。またそのような分解がなされなかった熟練職業においても、その職業への入職が効果的に管理されていないときには、少教者しか労働貴族の境遇を維持できなかった。同時にまたその労働が産業上の変化によって半熟練労働者となったとしても、「アーティザンの経済的利点を確立しえた労働者のグループは」、「アーティザンに同化されたのである」。この点のかれの1979年の論文で論じられているので、ホブズボウムの労働貴族概念のひとつの特徴としては、この内容を採用すべきであろう。

労働者階級内での労働貴族と他の階層との関係についてホブズボウムは、労働貴族は中産階級の下層とは融合していたが、「いかなる事情のもとでも不熟練労働者と混同されることなく」、また労働貴族と不熟練労働者との間には大きな中間層が存在している、としている。このうち労働貴族と不熟練労働者とが混同していなかったという点については、労働貴族は不熟練労働者を劣った階級であるとしなしていたこと、また労働貴族は不熟練労働者の2倍以上の賃金を得ていたことが強調されている。そしてこの賃金格差をもたらした要因として、「労働貴族が全体としてその職業への入職を制限するか、あるいはその他の手段によって、かれらの労働を人為的に希少にしておく力を有していたこと」をあげ、この「相対的に恵まれた労働の希少性は労働市場における他のものの相対的過剰の一作用であり」、したがって労働貴族が「獲得した相対的に恵まれた諸条件は実際には単にブリテンの企業が支配していた世界の他の人びとの犠牲においてばかりでなく、かなりの程度かれらの恵まれない仲間たちの犠牲において達成されたものであった」ことが主張されている。しかしこの点は、かれの1970年の論文では次のように修正されている。「競争原理に基づくリベラルな『自由放任主義』の資本主義とインフレーションの状況下にあつて、「実力あるわずかのプロレタリアートのグループによる団体交渉も含めて」市場以外には、世界独占の利益をイギリスの労働者に分配する機構がないという理由」で、「19世紀イギリス資本主義の世界独占はプロレタリアートの下層部分にはほとんど利益をもたらさず、その一方で労働貴族には相当な利益をもたらした」のである。そしてこの点に関しては、労働貴族による熟練の維持とその職人の制限をもつばらの目的とする古典的職能別労働組合が「決定的役割」を果たしたことが重視されている。

また労働貴族と不熟練労働者との間に存在する労働者については、かれらは「裕福な労働者、普通の熟練労働者、およびかれらに類似の者たち」で、したがって、こうした労働者から「労働貴族を区別する明確な線はなかった」が、しかし労働貴族は、こうした労働者を「教育の不足とおそらく道徳的な力と勇気とのある程度の欠如のために……第一級の労働者に匹敵し……ない人びと」とみなし、自分たちがかれらよりもより質的にすぐれていると考えていたであろうことが指摘されている。

ところで労働者階級のある部分を労働貴族たらしめるうえで労働組合が決定的役割を果たしたと考えるホブズボウムは、労働貴族を実際に構成している労働者を労働組合運動の構成に基づいて明らかにしたうえで、次のようにいっている。1840年から90年代までの時期には、「旧い前産業的手工業から新しい金属産業への労働貴族内における重心の移動と、以前には基本的に不熟練労働者と誤ってみなされていた諸職業における労働貴族の若干の要素の出現とがみられ、その規模は労働者階級の約10パーセントと推定され、1890年代と1914年までの時期には、「その重心はさらに一層金属産業へと移動し」、その規模は労働者階級の15パーセント以上ではないと推定される。

そしてホブズボウムは、労働貴族は一般に「強固な自由主義的急進主義」を自らの政治的信条にしていたと述べ、さらにこの労働貴族のイデオロギーに関しては、次のような指摘をしている。「1867-75年の労働組合法の、調停およびスライディング・スケールの協約を要求する種々の団体の、そして混乱を避ける手段としての組合に対する企業家の擁護の時期」までは、「戦闘的チャーティスト労働者の上品な労働貴族への変質」は、「資本家の政策におけるいかなる重要な変化もなしに、そして労働者の政策での比較的わずかな意識的变化を伴っただけで、『自然発生的に』おこり」、ゆえに「新しい運動におけるチャーティストやオーエン主義の指導者たちは、いかなる意味でもかれらの長期の諸目的を放棄しようとはしなかったものであり、それは単に旧来の諸スローガンの内容が新しい経済関係のなかで変化し、明瞭な社会主義理論の欠如のゆえについには次第に意味を失うにいたったにすぎない」。したがってウェッブ夫妻⁽¹⁰⁾は、「1870年代以前の労働運動指導者らによる自由主義経済学の容認を誇張」しすぎていたようである。明らかにホブズボウムは、労働貴族はストレートにブルジョア・イデオロギーに浸潤されていたとはみていない。

ホブズボウムは、グレイやクロシックによる19世紀イギリス労働貴族研究に基づいて、住居、居住地域、服装、社交、娯楽活動、結婚、教育などに関わる習慣、ライフ・スタイル、生活諸条件の役割を重視している。もちろんホブズボウムにあつては、アーティザンの有するこれらの諸要因はその賃金水準に支えられるものであるが、それらはまた、リスペクタビリティ respectability、成功 achievement、そして地位 status をシンボライズし、「サミュエル・スマイルズやヴィクトリア朝の中産階級の理想の諸基準によって」アーティザンを労働者階級内のエリートとして特徴づけるのである。しかしまたホブズボウムは、リスペクタビリティを求めることは「単純なイデオロギー上のブルジョア化(……)意味するものではないことを強調している。それは、アーティザンが「自らが労働者階級の一部であると認識し」、プロレタリアートとしての地位を終生の運命として受け入れている」からであり、また例えばアーティザンにとっては、自助 self-help は(友愛協会、協同組合などの)集団的諸制度なしには現実的にはなりえず」、そして「ヴィクトリア朝の時代における労働者階級のリスペクタビリティは、中産階級の否認する、主としてパブと結びついた諸活動を含む」がゆえに、アーティザンのそれは「中産階級のそれと同一ではない」からである。

以上がホブズボウムによって定式化された19世紀イギリス労働貴族であるが、次に19世紀イギリス労働貴族研究におけるマルクス主義歴史家のなかでは、ホブズボウムによって例外とみなされたフォスターの研究をみてみよう。かれは、「レーニンにあつては労働貴族の存在と発展した資本主義諸国の明白な安定とは分ちがたく結びついており、かれは、外国投資に基づく新しい型の帝国だけがブルジョアジーが労働者階級の基本的部分を買収し、中立化することを可能にしたと主張している」、といて次のように述べている。「この議論が正しければ、それを最も明白に確証するイギリス史の時期は19世紀である。資本輸出、賃金格差の全般的拡大、そして以前の強力な労働者階級運動の急速な崩壊への大規模な転換がもたらされたのは、この特定の時点においてである」。そして「オルダムがこれらすべての発展の明白な例を提供している。それは多くの外国の繊維産業に機械を供給し、1861年までにその町の男子労働者の20パーセント以上を雇用するまでに拡大した機械産業を有しており」、そこでは1839年から1859年まで労働者階級の下層半分の労働者の賃金は下落し、そのより上層の労働者の賃金は急上昇し、「熟練労働者と不熟練労働者との社会的分離は著しく拡大したのである」。

そしてホブズボウムによる19世紀イギリス労働貴族の経済的分析があくまで賃金を基礎に行われているのに対して、フォスターはその形成を生産の場において分析している。かれは労働貴族の特質として「仕事における権限」を強調し、生産の場において労働貴族となる新しい型の労働者が19世紀中頃に出現したことを強調している。すなわち、機械工業では新しい技術の導入と1852年のロック・アウトにおける労働者の敗北の結果、内部請負制度が全面的に導入されたが、この制度は熟練機械労働

者を、他の労働者に仕事を与え、かれらを主導しながら「上から専門的に表現された指令」を遂行する出来高親方として「経営の仕事」に積極的に組み込むことを可能にした。したがってこの出来高親方は、仕事の手順を自ら決めて雇用主から独立していた従来の熟練機械工の「自立性」を失うことになったが、これが新しい型の労働者であった。また綿紡績業においても19世紀中頃に、「新しい型の機械による現存の労働者の代替よりもむしろ現存の労働のスピード・アップを要求する技術的（そしておそらく経済的）状況」と「時間賃金を支払われている多数の不熟練労働者（少年少女と婦人）が新たな交渉力を見いだすという労働状況」のもとで、出来高払いを受けた紡績労働者がこれらの労働者の「主導者」“pace-maker”となり、「経営のために統制を強化することになった」。こうしてこれら2つの工業におけるこうした労働者は、「他の労働者に対して主導者として仕事を与える人として行動し、そうすることによって熟練工の行動に係わる以前のすべての伝統と決定的に切り離された」が、かれらこそまさしく労働貴族なのであった。そして以上のような労働貴族の形成は、「オルダムのブルジョアジーが労働者階級を分裂させ、そしてその上層を買収して政治的に黙従させるために、その産業上の力（と帝国の経済的・心理的現実）を意識的に用いた」ことに基づいている。

以上がフォスターによる19世紀中頃のオルダムにおける労働貴族の出現の分析であるが、かれはさらに、1880年代からの変化によって1914年の時点で、「労働貴族は支配の手段として50年前のそれとは全く異なったものになった」、として次のように述べている。「労働組合組織が労働者集団の全域に広がり、反資本主義的諸要が再度しっかりした足場をかちとったので」、労働者の反資本主義を排除する試み「の重点は、その指導者（……）を捕えること、かれらの敵を破り、孤立化させる組織能力を強化する方向へ移った。」。この理解は、ブルジョアジーによる買収の対象が1880年代以降次第に労働貴族から労働官僚に移行するようになったことを示している。

ところで、エディンバラにおける19世紀労働貴族の形成を論じたグレイは、「文化的・イデオロギ的諸困難が受動的に経済構造を反映している」ということを受け入れるさいに伴われる「危険な通俗化」に警告を発しながら、フォスターのいう「仕事における権限」に着目し、生産の場における労働貴族把握を試みて、次のようにいっている。熟練労働者は、1890年代までは「アーティザン階層の非常に目立った職業上の『クラフト文化』‘craft culture’の原因でもあり、結果でもある」「仕事場におけるかなりの自律性を有していた」。しかしまた「分業の発展とそれと結びついた仕事における権限の配分」は「肉体賃金取得者の間で新しいヒエラルキーと区分をつくりだし、そしてこのヒエラルキーと区分は、熟練労働者集団とそれよりも熟練の少ない労働者の諸グループとの関係におけると同様に熟練労働者集団内でも作用し」、したがって、「熟練労働者の立場は単にクラフトcraftの自立性の点からのみ記述されることはできない」。また、「アーティザンと一般労働者との間における同様に熟練労働者の諸階層にも」賃金と生活水準での著しい差異がある。そして「新しい形態の分業、専門家のヒエラルキー、そして権限と責任の配分は、所得と安定さにおける差異と結びついていたようである。より良い賃金を得、より規則正しく雇用された者は、疑いなく雇用主が『信頼』し、責任が委譲された者であった」。したがって、「労働貴族は単に所得と生活水準の差異から生じたのではなく、これらの差異が19世紀後半のイギリス資本主義に特徴的な工業構造と結びついて出現したのである」。

さらにグレイは次のようにいっている。「多くの旧く設立されたクラフトの衰退と新しい熟練職業の出現」、より古いクラフト自体における構造上の変化を伴ったより精緻化された分業の出現と仕事の役割の序列的専門化」等をその特徴とする産業上・経済上の構造が労働貴族のイデオロギ的諸特徴と結びつくとすれば、その特徴は「単にクラフト的セクショナリズム（……）に見いだされるだけでなく、また19世紀中頃から現れてきた他の種類の生活様式と社会的イメージにも見いだされうるのである」。そして「『尊敬されうる』熟練労働者の生活様式が社会的優越感、すなわち、それほど恵

まれていない労働者階級の諸グループの意識的な文化的排除を突出させる傾向にある」ので、「『リスペクタビリティ』の諸価値と結びついた一連の態度や行動形態が上層アーティザン階層の文化的形成に貢献したのである」。また、ロンドンの主としてデトフォード、グリニッジ、ウリッジの3つの町から成るケンティッシ・ロンドンにおける19世紀労働貴族形成を論じたクロシックは、次のように述べている。階級意識と同じように、階層意識も「次第に永続的になるように思われた経済的・社会的体制における不平等、困苦欠乏、そして不安定さ」に関わっている。「ケンティッシ・ロンドンにおける熟練労働者間でのその成長は、労働者階級内における所得格差と関連した地位とリスペクタビリティの諸特徴を誇張することによって、ヴィクトリア中期の資本主義のより広範な経済的不平等と祈り合おうとする試みであった」。

そして「リスペクタビリティ」は、クロシックによれば、「ヴィクトリア中期の社会通念のうちで最も普及していたもののひとつ」であり、それは「個人的徳性と同様スタイルや体裁に対するその関心において基本的にヴィクトリア的であって、それは伝統的身分が社会的評価をくだす基準としてそれほど有効でなくなったより一層変動しやすく不安定な社会における、そうした基準として富に代るものを提供した」ので、「下層に位置し、無知で、一般的に不品行とみなされている労働者大衆の存在のもとで自尊を主張することは、ますます安定性を得るようになったアーティザンのエリートが自らの優越性を主張し、その一定の分離を達成する方法であった」。同時にリスペクタビリティは「個人の自尊心」だけでなく、「かれらのリスペクタビリティの外部的承認」と関わり、「世間での上昇に対する熟練アーティザンの関心の中心には個人として、そしてかれらの諸制度（友愛協会、協同組合、労働組合—筆者）を通じてのグループとして、このエリートによるヴィクトリア社会のなかでの、その価値とリスペクタビリティのより広い承認の達成があった」。またリスペクタビリティの核心は「自主独立」であり、それは「依存状態」、「その最も基本的なレベルにおいては」「救貧法と施しへの依存」からの離脱と、他の者の意志と指図からの独立」であった。そして「労働者は、かれの経済的・社会的状況によって負わされた貧困、大酒飲み、そして勤勉の欠如の最も基本的諸問題のいくつかに打ち勝つことができることを明らかにすることによって、それを主張せねばならなかった」。したがって「この自主独立を求める意志とそれを達成するに必要な道徳的資質がリスペクタビリティの証であったのである」。

このように、グレイとクロシックは、基本的にヴィクトリア的社会通念で労働貴族の階層としての形成をとらえているのであるが、かれらはまた、労働貴族のリスペクタビリティは決して労働貴族が中産階級のイデオロギーを、そのまま受け入れたことを意味するものではないことを明らかにしている。グレイによれば、中産階級は「尊敬されうる」、「節制的で」、「自己改善する」労働者という表現をしばしば使用し、こうした表現は「アーティザンの世界における諸制度のスポンサーによって実にしばしば繰り返されてきたが、この種の諸価値は中産階級のそれとは鋭く相違する別の行動様式と共存し、労働組合運動のイデオロギー的防御が、経済秩序に関するある基本的に個人主義的な前提の批判を伴って、その最も明白な表現となっている」。したがって、「労働貴族の相対的な経済的繁栄が、激しい周期的変動を伴う低賃金経済における労働者階級の存在の諸現実、かれらが密接に巻き込まれていたという事実を曖昧にすることを許さないことが重要で、これらの諸現実に対応して発展した団結と相互扶助の深く根をおろした習慣は、決して『自助』という用語によって安全に取り除かれるものではなかった。その用語は実際的には純粋に個人的な意味におけるよりもむしろ集団の意味において再解釈されるべきである」。

以上が、ルミスが批判した19世紀イギリス労働貴族に関する研究の概略である。そしてこれらの研究で大きな意味をもっているのは、賃金の高さと、ホブズボウムを別にすれば、熟練である。ではルミスはこのような研究をどのように批判しているのだろうか。

(2)

ルミスによれば、従来の19世紀イギリス労働貴族研究では、その労働貴族は労働組合によって組織された熟練労働者であるとみなされている。そしてかれは、こうした労働貴族が自らの地位を保持するのはかれらの雇用主との闘争を通じてであり、したがって、かれらは他の労働者よりもヨリ戦闘的な産業的・政治的役割を果たしたという考えは混乱を導き出すだけである、と述べている。ルミスはこうした考えをおそらくグレイとクロシックの研究から導き出しており、こうした労働貴族の戦闘性は、労働貴族は本来保守的であると考えられてきたことと矛盾すると考えたのであろう。しかしグレイもクロシックも、労働貴族はかれらの雇用主との闘争を避けるものではないことを述べているだけで、かれらが戦闘的であることを主張してはいない。

ルミスはまた、「仕事におけるある労働者による他の労働者に対する支配は、いくつかの労働貴族研究ではかなり強調されており、実際、労働史においては、ヨリ一般的に職工長foremen、組長chargehands、あるいは出来高親方piecemastersとして他の人々の労働を支配する権力は、雇用主のインタレストに従って行使される権力としてとらえられてきた」が、そうした理解は誤りであるとしている。おそらくかれは、そのさいフォスターの「仕事における権限」という概念を念頭においていたのであろうが、労働貴族に関する他の研究者は必ずしもそうした理解はしていない。それはともかくとして、ルミスが誤りとしているさいの論拠をみておくことにしよう。かれが日くには、おそらくほとんどの産業で働いているギャングマスターgangmasters、組長、あるいは職工長でさえ「雇用主のインタレストと同時に労働者のインタレストをも表現している」。そして出来高職人は、「ある非公式に課せられた一日の最大量を越えて生産しないことによって、所与の機械あるいは物資に基づく生産を制限する」ために支配力を行使するのである」ということを、「多くの研究」が明らかにしている。また出来高仕事は、「監督のレヴェルと作業場で行使される（労働者の…筆者）コントロールの程度に基づいている」がゆえに、「出来高仕事は他の生産諸制度よりもヨリ搾取的であると無意識のうちに想定すべきではない」。したがって、「熟練労働貴族は作業要員から最大限の労働を引きだすために雇用主に巻き込まれることはなかった」し、「他人の労働を搾取する労働貴族が仕事のペースを押し上げ、そうすることによって自らに対する仕事のプレッシャーを増大させる理由は絶対になかった」。しかも職工長のほとんどは、例えば、仕事が乏しくなると不熟練労働者は解雇され、それにとまって職工長の数も減らされるので、かれは自らが労働者であることを強く意識し、労働組合にとまどっていたのである。労働貴族が他の労働者に対する支配者ではないというルミスの主張は、概ね妥当なものであろう。

またルミスは、労働貴族は雇用主によってつくられ、仕事において雇用主の意向に従うというフォスターの理解は、「雇用主のかなりの権力にあまりにもウエイトを置きすぎ、その時期の出来事を経験した労働者によるその状況の評価を十分に」認めていないと批判し、次のように述べている。

「19世紀中頃までに30歳以上になっていた労働者は1830年代のジェネラル・ユニオンGeneral Unionの失敗やチャーティズムの敗北を目撃し、経験した」がゆえに、「ヨリ初期の労働者階級の組織や抵抗の諸形態が結果的には期待したことをもたらすことに失敗した」という認識をもつようになった。したがって、「1830年代と1840年代の経験ののちにセクト的反応があったということは驚くべきことではない」。そして「ある程度の保障をしゃにむに求める労働者にとっては、組織の継続性が最も重要なのであって」、その継続的な組織は、「ひとつの熟練に基づき、高いコストの福祉保険金を負担できる労働者に限定した労働組合」であった。しかし、こうした熟練労働者によって組織された労働組合は、「労働者階級内に政治的、あるいは文化的裂け目」をもたらすことはなかった。というのは、こうした労働者を羨んだ不運な労働者はまた組合を組織した熟練労働者の「諸活動を良識あるものと

して推賞し、すべての労働者の賃金を不断に引き下げる圧力に対す一定の防護として歓迎さえした」からである。こうしたルミスの考えは否定しがたいものである。

ホブズボウムは労働貴族の規模を労働階級の10～15パーセントとしていたが、ルミスは、労働貴族層はもっと広い層であり、かりに労働者階級の30パーセント以上であるとすれば、「それは他の労働者との区別を示すことをやめ、その存在は労働者階級の経験の主流をなす部分となり」、そして「ホブズボウムも、この概念（労働貴族概念一筆者）の可能性のある弱点は、労働貴族が比較的かなりの暮らしをしている労働者のより大きな層に沿入される可能性であることを認めている」、といている。さらにかれば、「たとえ労働貴族が労働者階級の約10パーセントであったとしても、かれらが労働者階級の他の部分を穏やかに、あるいは無力にするうえで決定的に重要であると、如何に立証することができるかということも明らかでない」、と主張している。これらの労働貴族とそれに関連した労働貴族の労働者階級内での役割については、従来の労働貴族研究では必ずしも納得のいくようには論じられてこなかったことは明らかである。

ホブズボウムの労働貴族分析で最も特徴的なのは、全国的平均賃金が主たる分析要因となっていることである。そしてルミスは、それは「労働者階級内の生活水準における区分の確かな指標としては不十分であり、かつ労働者階級の他の部分から労働貴族を切り離しはしないだろう」、として次のようにその理由を示している。すなわち、「賃金の地方的変化は非常に大きく」、したがって、「生活費は地方ごとに様々であり、産業的諸要素も、他の家族員にとっての仕事の機会の可能性、労働生命の長さ、そしてその賃金に頼る家族員数から、その賃金が稼がれる時間の長さに至るまで非常に大きく変化しており、さらにそれらに「社会的諸要図」も付け加わり、ある都市の労働者は高賃金を得ていたけれども、「他の所の低賃金労働者よりもより良い生活水準」を維持することはできなかったということもあったのである、と。それゆえ、「たとえいくつかの産業で労働貴族がつけられたとしても、そのような形成から、普遍的で一貫した社会的、文化的、そして政治的結果が生じてくることを当然のことと考えることはできない。タインサイドのボイラー製造工、パークシャーの鞍製造工、そしてロンドンの時計製作者は労働貴族であるかもしれないが、かれらがかれら自身の職業あるいは場所における非労働貴族よりも互いにより共通した諸価値を有しているかどうかは未解決の問題である」。確かにホブズボウムの全国的平均賃金での労働貴族分析には大きな欠陥があるようだ。

従来の労働貴族研究では、ホブズボウムは別として、必ず熟練が重視されたが、ルミスは労働者階級の分析では熟練をさして重視してはいない。「ほとんどの研究者は、熟練（すなわち特定の才能）が、通常、労働市場において過大な価値を強要したことを拒否はしないが、しかし1840年代における極貧に苦しむ手織ばた織布工が一世代前に栄えていた、そうした織布工より劣った熟練を有していなかったということを思い起すことは価値あることである。熟練は常に過大な価値を強要しないし、そして雇用主が賃金支払いの対象とする唯一の特性ではない。雇用主はまた、勤勉、真面目さ、作業時間を良く守ること、忠義、そして特定の個人が企業の成果やインタレストに最良の努力を注ぐさいの知識に対しても快よく支払いをするのである」。また「特定の熟練は会社の費用で修得され、それらの熟練の使用は特定の会社の作業に精通していることを要求した。会社は、いかなるグレードの人びとであっても、信頼性のある労働者を首にすることをひどく嫌うのであった」。しかも、「いかなる熟練労働者グループも、自ら自身の生産諸関係を創設する力を有しているということを当然のことと思い、労働者に対する雇用条件を強要する雇用主の力を過少評価する」ことはできず、「雇用主の重要な諸力はひとつは労働者集団の一部に有利な立場を与えることによって、その労働者集団を分裂させることであった。このことは、熟練労働者よりも提供するものがより少ない不熟練労働者に対して、あるいはその熟練が容易に移転されえない鉄道のような独占的諸組織で最も容易に達成された。（しかし）それは熟練労働者にはそんなに容易に押しつけられなかった。というのは、かれらは自らを一

体化する職業trade上の諸権利という活動の中心を有して、それゆえに他の労働者よりも分裂させることがより困難であったからである」。また「不熟練労働者さえ、ときにはあるタイプの労働におけるかれらの専門熟練がかれらを実際に掛替えのない存在にする適所を得ることができ」、「『身体的習性』といわれているものがいわゆる不熟練労働者のための特別な労働市場を形成していたのである。確かに熟練と不熟練というラベルは、種々の形態の雇用条件、労働者の交渉力、あるいは雇用主が快よくかれらを扱う仕方を考察するさいには、必ずしも最も有益なカテゴリーではないのである」。

このようにルミスは、「熟練」と「不熟練」という概念が、労働者階級を分析するうえで、必ずしも有益なものではない、と主張しているのであるが、このことはまた労働組合運動にもあてはまるという。「どんな特定の労働組合であっても、それらが所定の時期に対処しようと試みていた具体的な状況がその労働組合内の産業的・政治的活動の実際のレベルに影響を与える主要な要因であったかもしれない」。したがって、「19世紀中頃の『旧』職能別組合craft unionと1880年代の『新』不熟練労働組合との間には基本的に異なった目的はなかった、と論じられよう」。「こうした諸状況が、熟練と不熟練との間のいかなる顕著な分裂よりもよりはるかに特定のなのであった。不熟練労働者の組合は熟練労働者の組合のセクショナリズムの意識とは異なったより広い階級統一意識をもっていなかったし、不熟練労働者の組合は、統合する熟練労働者の組合と同じように、自らの間での共通の立場を共有してはいなかったのである」。このように、ルミスは労働者階級分析において熟練を軽視し、それとの関わりで『旧』組合と『新』組合との相違を相殺しているが、これらは、従来の労働貴族研究のみならず、もっと一般的に従来の労働史研究をドラスティックに修正することをせまるものであるがゆえに慎重な検討を要しよう。

さて最後になるが、ホブズボウムは、労働貴族は他の労働者を犠牲にして高賃金を得ているといっているが、ルミスは、この点もムーアハウスの主張に基づいて批判している。「賃金レベルは階級闘争の産物であることがマルクス主義者の公理であった」ので、「労働貴族の経済的維持は確かに雇用主の費用負担に基づいていた」。また「労働貴族が自らの稼ぎのレベルを達成しなかったならば、それで浮いた金銭は低賃金労働者に配分されたかもしれないということを当然視する理由はない」。その行先は株主であったのである。確かにホブズボウムは、1954年の論文では、「相対的に恵まれた労働者の希少性は労働市場における他のものの相対的過剰の一作用である」ことを理由に、労働貴族が「獲得した相対的に恵まれた諸条件は」、「かなりの程度かれらの恵まれない仲間たちを犠牲にして達成されたとしているが、1970年の論文では、「競争原理に基づくリベラルな『自由放任主義』の資本主義とインフレーションの状況下にあつて、(……)市場以外には世界独占の利益をイギリスの労働者に分配する機構がないという理由」で、「19世紀イギリス資本主義の世界独占はプロレタリアートの下層部分にはほとんど利益をもたらず、その一方で労働貴族に相当な利益をもたらし」と述べ、1954年の論文でいわれていたことは1970年の論文では修正されている。そして後者の論点が正しいものとすれば、ルミスはホブズボウムの1970年の論文における指摘を見落していることになる。

以上のように、19世紀イギリス労働貴族研究を批判するルミスは次の2点を強調している。すなわち「救貧法のもとで貧困者が利用できる他の社会福祉が存在していない状況においては、良い地位にある労働組合に組織された労働者さえ、しばらくの間続く失業によってかれらの適度な安楽さが急速に破壊される。「合同機械工組合」‘Amalgamated Society of Engineers’—ASE—さえ仕事の減少によって毎年組合員の約3パーセントを失っていた。相互の自家保険を通じての保障は、熟練労働者で組合に組織された者であっても、そのきわめて少数の者にしかあてはまらず、かれらにあつてさえ、その保障はかれらの状況を限定された期間しか維持しえない。確かなことはひとつであつて、すなわち、資本主義制度の変動はすべての労働者が安定した不変の雇用を享受できないことを明確にしていたということである」。したがって、19世紀における実際すべての労働者の主要な問題は雇用の継続

を確保することであった。そしてまた「たとえ理論的には資本主義制度は労働者を最大限搾取するとはいえ、互いに競争しながら生産活動をしている現実の企業は、ときには良い雇用主として知られることが有益であることを見いだした。(すなわち) 忠実な労働者集団をつくることは雇用主にとってはかなりの利益となり、19世紀の不安定な世界では、比較的少額の賃金譲歩、あるいは福祉手当で献身的で勤勉な労働者集団を確保するのに十分でありえた」。

こうした状況をふまえてルミスは、それぞれの企業に、あるいはそれぞれの階層に、雇用の継続を保障された「安定した」労働者集団とその保障のない「不安定な」労働者集団が形成されたことを強調している。そしてかれは、前者の労働者を「会社べったり労働者」「company men」といい、後者の労働者を「結合労働者」「associated men」と名付けている。そしてこの「会社べったり労働者」はまた「労働貴族」「aristcrats」と、「結合労働者」は「准労働貴族」「sub-aristcrats」といっていいとしている。がいずれにしても、「会社べったり労働者」と「結合労働者」という概念は、「ひとつの階層における異なった精神的態度の存在と同時に、異なった諸階層における同種の精神的態度の存在」を明らかにすることができるという。

ところで、ホブズボウムは労働貴族を理論的に規定すに6つの指標をあげ、そのうち第1の指標、すなわち「労働者の収入の高さと規則性」が最も重要であるといっているが、ルミスはこのホブズボウムの考えを次のように批判している。「かれの第1の判断基準は収入の『高さ』と『規則性』を合同して、実際には合成基準となっている。しかしこれは、『高さ』と『規則性』が必ずしも相伴わないので、論理的に正しい組み合わせではなく、そして経験に基づいてさえ、規則性は高賃金労働者よりも、並の、あるいは低い賃金を得ている労働者にヨリしばしば見い出されたのである。所得の規則性はホブズボウムの第2の基準である『社会的保障』とヨリ難無く結びつけることができ、そして私の研究方法では、所得の純粋な高さよりも規則性と保障がヨリに重要な役割を果たしているのである」。繰返すまでもなく、ホブズボウムは収入の「高さ」で労働貴族を分析したのに対して、ルミスは「規則性と保障」の基準で労働者階級を分析したのである。

以上がルミスによる19世紀イギリス労働貴族研究批判と新しい研究方法のモデルの提示であるが、次にルミスが、種々の産業における労働者を分析することによって、このモデルをどのように展開させたのかを見てみることにする。

(3)

ルミスはまず機械工を取り上げているが、そのさいかれは、始めに、1868年に刊行されたトマス・ライトの『偉大なる下層民』⁽¹¹⁾における労働者階級の階層区分を以下のように紹介している。ライトは、「労働者は少なくとも3つの主要な部分に区分しなければならず、それら典型的な労働者はそれぞれ教育ある労働者the educated workingmen、世間一般でいう知性的アーティザンthe intelligent artisans of the popular phrase、そしてロー氏のいう労働者Mr. Low's working menといってもさしつかえない」、と書いている。これら3つのグループのうち、教育ある労働者は「断固として最良の労働者」であり、そしてマルクス主義モデル(私の「会社べったり労働者」)によって自明のこととして仮定されているように、保守的で向上心のある労働貴族に置き換えて記述されたグループであった。かれらは労働者階級の比較的小さな部分でしかないが、しかし、マルクス主義理論と自由主義理論の両方によって主張されているように、階級協調の方向に作用する指導的役割を有していると思われている。すなわち、「それはかなりの程度その比較的少ない数を道徳的影響力で補い、特に労働者階級の社会的立場、あるいは政治的インタレストをヨリ重視する諸問題に関する意見を修正するうえで、その影響力は今かなりの効力をもちはじめている」と、ライトは書いている。かれは、「かれらの個

人的目的は概して自らを向上させて労働諸階級から抜け出ることであり」、それゆえに、労働貴族に関する通例の定義の一部である上方階層への移動志向を現わしている、と言明しつつづけている。かれらはまた、かれらの労働組合のメンバーであるということでも、もうひとつの基準を満たしているが、しかし、かれら自身の保障を確実にすることに非常に特別の関心をもっている組合員である。「たとえば打算的理由から、そして独立していることへの見込みをもって、教育ある労働者は一般に労働組合や共済組合のメンバーになるにしても、かれらはめったにいわゆる良いメンバーではないのである」。かれらは、その主な議事日程が大いなる相互の社交性と飲酒をもって決まりきったものであったときには、その会合には定期的には出席しないが、普通でない活動があるときにはいつでも、労働組合の役員たちの活動と組合資金の支出とを制限する意図をもって必ず出席したのである。要するにルミスがいうには、ライトが描写した「教育ある労働者」とは、「単にその友愛協会の給付と職業の排他性のために労働組合のメンバーになるが、しかし、政治的仲間の結集、あるいは団結に対するそのヨリ幅の広い要求を切り詰めようと試みる保守的な労働者」なのであった。

ライトのいう「知的性アーティザン」は、ルミスのいう「結合労働者」に相当する労働者であり、ルミスは、ライトはその労働者を次のように画いている、と述べている。かれらは、産業上の熟練、あるいは能力の点では「教育ある労働者」と違いはなく、その相違は意見、あるいは行動に関してであった。「知性的アーティザンは、政治へのいかなる形であれ特別の性向をもち、あるいは政治について実際になんでも知っているからではなく、職業煽動家に最も容易に影響されやすいがゆえに、すぐれて政治的労働者である」。そのさいライトが、チャーティズムの諸伝統と、おそらくジェネラル・ユニオニズム General Unionism の初期の諸伝統にさえ注目していたことはおそらく疑いない。たとえばライトがこのグループに同情を寄せていなかったにしても、かれらは階級団結への誠実な責任を認識し、その階級団結を重んずべき誠意を有していた。「たとえ頑迷に自らの意見に固執したとしても、かれらは利己的ではない。なぜなら、かれらは自分たちの諸原理を支持して大きな自己犠牲をはらうからであろうが、かれらがそれぞれの諸原理のために戦うのは、個人的に自分自身のためであるよりもむしろ、かれらの階級のためである」。そしてライトはまた、このグループに関する限り、「たとえばかれらの教育ある仲間と同じように野心的ではないにしても、知性的アーティザンはそんなに満足はしていない」というパラドックスのなにがしかに言及していた。ここにルミスは、ある種の労働貴族研究が主張していると考えたところの「個人主義的社会的向上心ももたず、階級意識のある戦闘的な労働貴族」を見いだしたのである。

ライトのいう「ロー氏の労働者」は「ヨリ貧しの労働者」であるが、かれはこの労働者グループについては十分に述べていない。

以上が、ルミスによるライトの労働者階級の階層区分の紹介であり、繰返しになるが、かれはライトのいう「教育ある労働者」が「会社にべったり労働者」に相当し、「知性的アーティザン」が「結合労働者」の説明になっている、と考えている。そしてさらにルミスは、ライトによる労働者階級の階層区分を1879年刊行の「労働者」氏 'A Working Man' の手になる『男子労働者と婦人労働者』⁽¹²⁾ における労働者階級の階層区分で補強している。「労働者」氏は、労働者階級内のひとつのグループの労働者を「終身仕事保障労働者」 'the job for Life man' と種別し、その労働者について次のように述べている。かれらは、肉体労働者としての体力が弱くなってくると、かれらに直面する通常の諸問題から免れて、安楽な老後を保障されるが、こうした特権は雇用主が自発的に労働者に与えたものである。というのは、そうした労働者は、自分たち自身とかれらの将来を、全体としてのかれらの熟練仲間よりもむしろその特定の企業と結びつけ、そうすることによって労働者集団の産業上の団結を分裂させるからである。また「労働者」氏は労働者階級内のもうひとつのグループの労働者を「活動家」 'the rolling stone' と分類し、このような労働者は雇用主との安定した関係をもたず、最も献

身的な労働組合員であるが、それは、かれらの地位を保障する唯一の手段がかれら自身の結集した力であったからである。そしてルミスは、「終身仕事保障労働者」は「会社べったり労働者」であり、「活動家」は「結合労働者」であると考えているのである。

そしてルミスは、1850年代から1870年代にかけて、ASEはイギリスの総熟練機械工の約3分の1を組織するようになり、その組合の大多数の組合員は「会社べったり労働者」であったとし、さらにクロシクの『ヴィクトリア朝社会におけるアーティザン・エリート』から次の文章を引用している。ロンドンのグリニッシの「造船所における仕事に対する魅力は安定した地位であった。というのは、変動が生じるのは雇い労働者the hired menの間においでであったからである。ウリッジ造船所における1860年11月から1861年4月までの週平均従業員総数は2,069人であったが、しかし1,322の部所だけが安定した地位として公認されていた。デトフォードの数は1,032名と680であった」。もちろんここで公認された安定した地位について働いている労働者は、ルミスによれば、「会社べったり労働者」であった。このようにルミスの研究は、熟練機械工のなかで占める「会社べったり労働者」の役割は決して小さくないことを示唆している。そしてその背景には、1850年代から1880年代にかけての機械工業の急速な拡大による熟練機械工に対する需要の増大があったことが指摘されている。

このように、1850年代から1870年代にかけて、ASEの大多数の熟練機械工は「会社べったり労働者」であったがゆえに、この組合の政策は雇用主との協調に対する強調、共済協会の支払い水準に対する誇り、そして反ストライキを特徴とすることになったという。しかしルミスがいうには、1860年代後半から1870年代にかけてさえ、「保障された不変の雇用機会」が減少し始まったことに、ライトと「労働者」氏は気付いており、その減少は1880年代と1890年代にヨリ一層促進され、「その時期になると、ASEへの新加入者、すなわち若い一般組合員たちはこのような比較的永続的な雇用を確保する機会をほとんどもつことがなくなった」。したがって「かれらは、不断に減少しつつあった安定した雇用グループによりむしろかれらの地位を改善し、維持するために、かれらの集団的力に大いに期待する必要があったであろうし、実際には期待せざるをえなくなった」。その結果、一般組合員と組合執行部との間に利害の衝突が起るようになり、また、1871年4月にサンダーランドで非組合員労働者が9時間労働日を要求してストライキを始めると、組合員と非組合員、あるいは熟練機械工と不熟練労働者によって「9時間同盟」‘the Nine Hour League’が結成され、大規模な9時間労働日要求運動が展開されたのであるという。

ついでルミスは港湾労働者を分析しているが、かれがいうには、稀少性、熟練、あるいは効力ある労働組合運動から生じる交渉力を全くもたない、この混乱した職業において、単なる不熟練労働者は3つのグループに分割された。それらは「常勤労働者」‘permanents’グループ、「抜擢労働者」‘preferred men’グループ（あるいは「公認労働者」‘ticket men’グループ）、そして「臨時雇用労働者」‘casuals’グループであった。そのうち「常勤労働者」は雇用を保障され、雇われた状態で疾病手当を支給され、かつ医療処置を施され、そして退職のさいには年金が支給され、また仕事における職権関係を持ち、社会的に区画された所に住む労働者である。それに対して「抜擢労働者は」、「臨時雇用者」よりも先に雇用され、例外的な不景気なときにのみ雇用変動の影響を受けるが、「常勤労働者」と同じ保障は受けていない労働者である。そして「臨時雇用労働者」は仕事を奪い合うことで悪名高い労働者であるが、「かれらの多くは、自分自身の職業が回復するまで某かの金銭を手に入れることを望む他の職業の失業者であって」、その多くは熟練労働者であった。「1860年代と1870年代に高熟練絹織工が、ロンドンのドックで臨時の仕事を見つけ出す労働者の目立った部隊であった」という。ついでながら触れておくと、「熟練労働者はまた、それが提供する保障のために不熟練労働者として永続的に働く用意があった。常勤労働者の以前の職業に関する、ある1880年代の調査によれば、不熟練労働者がそのサンプルの16パーセントであったのに対して、以前アーティザンであった者

は全体の28パーセントを占め、最大のグループであった」、という。

ところで、ルミスはロンドンのイースト・エンド・ドックにおける港湾労働者のそれぞれのグループの比率を、「常勤労働者」1人に対して、「抜擢労働者」は2人、「臨時雇用労働者」は6人として、「常勤労働者」は「会社べったり労働者」であり、そして「抜擢労働者」は「結合労働者」であるといっている。そして港湾労働者がこのように分割したのは、「かれらの仲間の労働者に対してでなく、会社に忠実な一定程度の労働者をつくることによって職業的団結を打ち破る意図をもった」「雇用主の計画的な政策」の結果であった、と主張されている。

このようにルミスは、熟練機械工と不熟練港湾労働のなかに、それぞれ「会社べったり労働者」が形成されたことを明らかにしているが、それでは、両者は熟練の点で異なっているだけで、その他意識の面等では同じであったといえるのであろうか。その点をルミスは次のように述べている。「熟練機械工が自らを自らの雇用主に推賞するうえで、勤勉と服従以外にほとんど何ももたない常勤雇用港湾労働者とは異なった産業上の意識を有していたということは疑いない。かれらの雇用主に対する評価に関するかれらの主観的意見と、かれらがなぜ揺るぎなく雇用されているのかという理由に関するかれらの理解は全く異なっているかもしれないが」、かれらが生きるために採用している戦術は同じである。

ところで、港湾労働者のなかにも高賃金を得ている不熟労働者がおり、かれらは石炭運搬人、穀物運搬人、そして木材運搬人であって、「筋力の貴族」といわれている、とルミスはいっている。そしてかれは、チャールズ・ブースの統計的研究に基づいて次のように述べている。「石炭運搬人は全盛期にある人びとが中心であるが」、「60歳代の人びとも依然としてそこに雇われていた（……）。ロンドンの石炭運搬人がとる通常のコースは、かれらが、石炭積み込み乗組員に要求される骨の折れる労働をもはや行なうことができなくなったときには、家庭用石炭配達人になることであった。このことは、これらの過酷な労働を要求する仕事場で働いてきた人びとはその職場を離れても役に立たなくなって捨てられることはなかったことを示している……この高賃金の仕事のほとんどは季節的であり、そして石炭運搬と穀物運搬が、ヨリ良く知られている煉瓦製造といっしょに、かれらの閑散期におけるガス産業からのレトルト・ハウスretort-house労働者によって好まれた職業であった。それらすべては平均以上の肉体的スタミナを要求し、平均以上の賃金を支払った職業であって、それゆえに、ある職業から他の職業に移動する不熟練労働者は高額の年収入を得ていたのかもしれない」。

「いくつかの点で19世紀後半の拡大し続けたガス産業における状況は、不熟練労働者内での冬期にしか雇用されない労働者と永続的に雇用されていた労働者の区分がある限りでは、ドックにおける産業状況と類似していた。そして永続的に雇用されていた労働者は良い賃金を得ていた労働者であった」、とルミスはいっており、さらに次のように述べている。「こうした労働者の50パーセントは安定して良い賃金を支払われていた。さらに重要なことは、ガス会社の多くは疾病手当、年金、そして利益分配さえ与えていたが、これらの会社は、ドック会社のように、かれらの仲間の労働者に対してよりもむしろ会社に忠実であろうとする核になる労働者を要求していた。……かれら（ガス産業労働者一筆者）は望んだ仕事場に行くのに便利な堅固な家に定住することができ、かれらの永い奉職は、かれらの（男子の）子供たちが学校を卒業したら、その会社に就職することを確実にし、かれらを、しばしば引合いに出されるのが次第に少なくなってきた『安定した熟練工』から区別するものはほとんどないのである」。「ガス産業はまた、産業労働者が労使関係をコントロールする手段として計画的に特権的グループをつくったもうひとつの例を提供しているのである」。そして「ほとんどの場合常勤雇用港湾労働者のような不熟練労働者は、絶対的保障と引きかえに低賃金を受け入れなければならなかったが、ガス労働者はかれらの規則正しさのゆえの高水準の社会的保障をもち、かれらの労働ゆえの高賃金を得ている点では例外的であった」。「低賃金でさえ、特に福祉手当、あるいは職務から

生ずる臨時収入に支えられて多くの熟練職業における労働者に欠けている一定の財政的現実性を提供することができた」。また「ロンドンにおける最も揺ぎのない安定した収入を得ていたグループは、10の醸造会社に雇われていた労働者であった」。「かれらはまた病気のときには半分の賃金を得、無料の病院、一週間の有給休暇を有し、そして多くの者は年金を支払われていた」。そして「高い水準の仕事の保障を有していた多くの他の職業とともに、これは、労働者によるいかなる特別の交渉力なしに得られ」、「その保障の程度は全くかれらの雇用主の好意によっていた」。

ルミスはまた次のことを強調している。「労働組合運動、独立、そして雇用主に対する抵抗は、賃金水準、搾取、あるいは管理的権威の程度にのみよるのではない。抵抗が発展するためには、公式の組合組織を通じてか、あるいは非公式の団結によるかどうかは別にして、かれらの満足のいく状態が管理の諸条件を受け入れることによって確保されるよりもむしろ集团的抵抗の力によって確保できるということを感じた多くの労働者が存在していなければならなかった。これは、労働需要における変動、競争的圧力の強さ、労働に対する資本の比率、代替可能な雇用の機会、そして管理、あるいは人びとのコントロールのなかには全く入らない同様の諸要素のような産業構造に関った多くの諸要素によっていたのである」。

(4)

以上、ルミスによる熟練機械工と、それに港湾労働者をはじめとする不熟練労働者に関する分析を見てきたが、ついでかれらは「安定した労働者」‘secure workers’として鉄道従業員と郵便局員を、「例外的に保障水準の高い労働者を典型的に示す」ものとして分析の対象とし、「かれらは、職業内における階層区分の可能性をつくりだすうえで産業構造がもつ決定的役割の明白な例である」としている。

そしてルミスは、鉄道従業員に関しては、「鉄道車両の制作と修理に従事していた多くの熟練アーティザン」を、「かれらは鉄道の雇用構造からより広い労働市場へと出て行くことができた」という理由で除外して、「物資や人間を運ぶ鉄道員」だけを取り上げているが、それだけでも世紀の変りめには約50万人いたという。そしてかれらは次のように述べている。「被雇用者は会社に全く忠実であり、1日のうちで、あるいは1週間のうちでいつでも呼びだしに応じ、そして仕事が続いている限り長いこと働くことになっていた。そして「会社に従順な被雇用者は解雇されず、景気後退による失業は稀であり、それは鉱物の運搬に大きく依存していた部門に主として起り、そして——建築業のアーティザンが影響を受けたような——契約の完了に伴う継続的失業も存在していなかった。かれらは医療処置、疾病手当、そして年金を提供されており」、さらにかれらは「社宅」を与えられ、多くのアーティザン・グループよりもより良い住宅に住んでいた。しかも鉄道会社は「従業員を何らかの仕事ができる限り終身で雇用し」、かれらの「健康が損なわれ始めたときでさえ」かれらを雇用し続けた。こうして鉄道従業員は、「雇用の保障、賃金の規則正しさ、社会的保障、昇進への期待、そして自分たちの子供の雇用の諸点で」、労働者階級内で高い地位におかれていたであろう。そしてかれらのなかで機関手はいわゆる労働貴族と同じ高賃金を得ており、しかもそのことは、「効力ある労働組合の援助なしに」「1人の雇用主への持続的サービスに基づいていた」ので、「私の言葉では、これは産業構造によって事実上そのすべての労働者が『会社べったり労働者』であった職業である」。

そして、低賃金鉄道従業員の状態もまた改善されたとして、ルミスは次のようにいっている。鉄道従業員の多くは農業労働者のような田舎の人びとであるか、また不熟練労働者の息子であり、したがって低賃金鉄道従業員の賃金も農業労働者の賃金よりもよく、さらに「最初のうちは労働時間と労働強度は、他の多くの職業におけるよりもそれぞれ目立つほどより長くなく、そしてより低いものであ

た」。さらにかれらが医療処置を受け、疾病手当と年金を得ていたのは明らかであり、また鉄道従業員に与えられた無料乗車証のおかげで子供たちは毎年一週間の休暇旅行に出かけ、母親たちは田舎の産物を都市に売りに行くことができた。また一日数列車しか通らない地方路線の労働者は、勤務中に、女がロンドンに売りに行く鳥をわなで捕えたり、時計や靴の修繕をしたりすることもでき、これらは「もうかる副業」であった。

このように、高賃金鉄道従業員のみならず、多くの低賃金鉄道従業員も会社に対する忠実さを強くもち、純粹に自分の仕事に満足していたが、それはまた、「ひとつには、それ自身の賃金と昇進階梯をもつ数多くのグレードをもったところの経営者が押し付けた雇用構造に基づいていたという。そしてルミスが曰くに、こうした状況は始めの頃においてであって、経営者は次第に労働強度を高め、賃金を引き下げていく政策を採用し始め、また「より多くの車両を牽引するより大きなエンジンのような技術的改革」を導入し、必要な列車乗務員の数を減らしていった。「これらのプレッシャーはたとえば鉄道がその実労働者数を増大させ続けたとしても、それはその増大率を減少されることにおいてであって、こうして、以前は数年の経験ののち機関手の正当な期待であったところの鉱物、貨物輸送から旅客や急行便の列車への昇進をスロー・ダウンさせることを意味した」。こうした弊害を被った機関手は、「かれらのグレードのより望ましくない部門」に止めおかれ、次第に「そこで生活のためにストライキをするようになり、そしてかれら自身の欠点でもないのに、かれらの産業上の仲間よりもより良くは報いられ遇されることはなくなっていった」。「かれらは、同じ地位の、しかもより年長の他の被雇用者と比較して、構造化された不利益を被った。かれらは、かれらの当然払われるべきものと決め込んでいた報酬のグレードでは、より低い限度に永久に止めおかれた。こうした理由でかれらは『結合労働者』の憤りと意識を最も発展しがちなグループとなったのであった」。

ところでルミスは、鉄道従業員の団結の強化の困難さについて次のような指摘を行なっている。鉄道従業員には、熟練労働者のように「生産過程の諸部分を自ら自身の手に保持し」、「資本の攻撃や他の労働者からの競争に対し、自分自身で雇用市場のかれらの場を維持する」という動機はない。というのは、「会社による従業員の雇用・昇進・賃金対策が他の労働者の競争や他の諸グレードからの侵入からかれらを保護していたからである。このことは、鉄道従業員から熟練労働者の組合運動の主要な結合力のひとつを奪っていた。組合員であることの、他の大きな動機とそのきずなは、失業、疾病、そして老齢に対する社会的保障の提供である。しかし、鉄道従業員は、かれらの雇用の約定によって、それらに対する保障を有していた」。しかしルミスは、「労働者がいやしくも組織されるということは資本と労働との避けがたい衝突をたぶん示している」、として次のようにいっている。

「雇用主は賃金を引き下げ、労働諸条件を厳しくする政策に着手し、そしてそうした諸状況が、かれらの労働者のある部分が集团的力と結合を通じて救済を求めるに十分な不満を引き起した。この状況のひとつの結果が、鉄道従業員のリーダーシップが、労働組合結成のこの初期の時期には、たとえば穏健に見えるかもしれないとしても、かれらは活動家であり、そして(ASEとはちがって)その全組合員より進んでいた」。

すでにみたように、「安定した労働者」としてルミスが挙げている別の労働者は郵便局員であるが、かれが具体的に分析の対象としているのは、そのうちの郵便集配人(ポストマン) post menと区分け係 sortersである。そしてかれは次のようにいっている。「区分け係は郵便局の建物のなかで、その土地の郵便物を配達のための円形の物体と、郵便制度の遠隔の地への急送のための他の郵便物に区分けした」。そして郵便集配人は1883年までは手紙を運ぶ者(レター・キャリアー) letter carriersといわれ、かれらは1883年まで「事実上機能と地位の点で区分け係と交替できた」。それゆえ、レター・キャリアーは区分け係に昇進することを期待することができ、かれらの賃金は「荒れ模様の天候でも景気後退のときでも一定であり、すべての常勤雇用の町のレター・キャリアーは退職年金、2週間の有給

休暇、病気のときには賃金の3分の2と無料の医療処置を保障されていた。またある程度のより高賃金の事務員のグレードへの昇進もあった」。ところが「小包郵便が1883年8月に始まった。町のレター・キャリアーは以前は小包を扱う仕事から免除されていたが……しかし高い鉄道運賃のゆえに経営者はコストを切り下げる必要にせまられ、レター・キャリアーに臨時給与なしに小包を扱うことを要求した。（ところが一筆者）かれらはこの変更には抵抗するに十分強くはなかった。グレードの変更と『ポストマン』への名称変更が、反対をうまく口実をもうけて遅らせるために導入されたのであった。それはまた、経営者が常に増大し続ける郵便物を扱うために常勤でない労働者を導入する道を開いた。そのことは最初の持続的な労働組合活動を導くことになった」が、しかし「かれらの経営者との闘いに区分け係はポストマンと連合しなかったので、その労働集団を分裂させる経営者の政策は成功したのであった。レター・キャリアーのポストマンという准労働貴族への沿落は、全体として労働集団がこれらの諸変化に抵抗できなかったことによって実際に強固にされた。かれらは今やより重い荷を運搬しなければならなくなって、仕事は強化され、そして、かれらの以前の信頼された配達人の地位から、かれらは今や肉体労働者とより同一視されることになったのである」。こうして、「この新しいサービスに必要となって導入された新しいポストマンの増大は、より有望でないサービス諸条件で雇用された常勤でない労働者の使用によって応じられた。これらの『補助の』ポストマンはいつでも解雇され、年金の諸権利はもたず、これは終身雇用とその終りのさいの保障をもつ常勤のポストマンの期待（と現実）と鋭い対照をなしていた。……そしてかれら、はポストマンの『准労働貴族』の地位にとっては持続的な脅威となったのである」。

さらにルミスは続けていう。「区分け係の諸条件を損なわないでおきながら、再編されたグレードの新しく雇用されたポストマンの諸条件のみを攻撃することによって、常勤人員のコストを引き下げたこの計画的な経営者の政策は継続された。レター・キャリアーと区分け係が大いに交替できた時期には、区分け係に支払われたより高い賃金は、レター・キャリアーにチップを与える慣習に基づいていた。……（だが一筆者）チップを受けるこの慣習は新しいポストマンには禁じられた。従来はポストマンも区分け係も事務員のグレードに昇進できたが、1886年の新しい規則のもとでは、ポストマンは『不熟練』としての部門に類別され、もはやこのような昇進には資格がないものとされた。事務グレードと高賃金への昇進は今や区分け係のみに開放された」。このように、「経営者は、かれらの労働者の向上に経済的・社会的に越えがたい溝をつくろうと試みた。経営者による地位の承認、高賃金、並ぶもののない保障、そして事務員と管理者の地位への昇級の機会、すべて区分け係を例外的に安定した労働貴族に変える役割を果たした。驚くことではないが、これらの出来事は、ポストマンが准労働貴族の地位、すなわちかれらの以前の地位と期待のゆえにより耐えがたくさえあった境遇に入ること余儀なくされたので、大きな不満を醸成させた。しかし経営者の政策は一方的に成功したことが証明された。ポストマンが1889年労働組合運動のうねりにのって自らを組織し始めると、区分け係はそれに超然としていて、翌年にかれら自身の組合……を結成したのであった」。そして「ポストマンが1890年7月にストライキを始めたときには、かれらは、当局者がそのストライキが終れば大蔵省は区分け係の諸要求に賛成するだろうと仄めかしたがゆえに」、区分け係の組合「によって支持されなかったのである」。

引き続いて、ルミスは「不安定な労働者」として建築労働者と炭坑夫を取りあげ、建築労働者については、かれらは、「その仕事の性質上、かれらが雇われている仕事がついに完成され、そしてその仕事の終りに、もしかれらの雇用主が労働者に対する同等の需要を必要とする新たな契約を結ぶことができないならば、かれらの多くは他の仕事を見つけなければならない。この不安定さは、かれらの手職業trade、熟練、あるいは労働組合結成のレベルに関係なく、建築労働者の経験の一部であった。建築労働者の小部分だけが『会社べったり労働者』になる機会をもっていた」、として次のように述

べている。「建築業は、熟練のある労働組合に組織され、高い賃金を得、そしてホブズボウムによって「高い比率の労働貴族を含むその産業グループに包含された労働者を提供し」、かつ「成人男子労働者が優勢で」、「熟練職人に対して異常に高い比率の不熟練労働者をもつ」産業であった。「1850年代から1870年代にかけて、建築アーティザンは戦闘的で、かれらは多くの地方的成功をおさめ」、1859～60年の苦しいストライキのさいの「団結の程度は、組合員と非組合員との間に分裂がなかったばかりでなく、両者がそのストライキ委員会に仕えて、アーティザンと不熟練労働者との統一もあったがゆえに、全く著しかった」。そして1860年に、ASEをモデルにして、「合同大工・指物師組合」

‘the Amalgamated Society of Carpenters and Joiners’ が結成されたが、それは、「その組合員を少数の安定した熟練職人に限定し、確りした共済会の給付金によってかれらの個人的福祉を確保し、かつ調停と仲裁を通じてかれらの報酬の改善を求める組合であった」。「この組合の組合員の大多数は、適度に安定した雇用と比較的良好な賃金を得ていた熟練職人が維持していた個人的優秀さ、節儉、節制、そして人としての規律といったイデオロギーを表明していた。これらの姿勢は事実上古典的労働貴族に典型的なものであった。大工は最も持続的な雇用を享受し、最もしばしば職長に選ばれた。それゆえにこのグループ内での高い組合費を要求するこのタイプの労働組合運動は意外なことではない」。

さらにルミスは次のように続けている。「不熟練労働者がこのような高額な組合費を負担できなかったかもしれないことはおそらく本当であったであろうが、より定額の負担金ですむ組合は合同組合の結成以前に存在していた。過去に起り、そして1880年代に再度起こることになったように、諸条件が、不安定なアーティザン」、あるいは不熟練労働者がかれらの収入にふさわしい組合費と目的をもつかれら自身の労働組合を結成することをあまり実行可能にしていなかったと仮定する理由はない。もし建設業合同組合に特徴的な何かがあったとすれば、それは、それらがアーティザンのうちの小部分しか組合員にしておらず、1888年には造船業では労働者の36パーセント、あるいは炭坑業と採石業ではすべての労働者の19パーセントと比較して、貴族大工の13パーセントしか組合に組織していなかったということである。このことは、異常に大きな部分を准労働貴族として残しながら、ひとつの熟練内の労働貴族に組織的形態を与えていたことを意味している。小さな割合の労働組合員でさえ異なった基本的イデオロギーをもつ区分された労働組合を形成するのと同じように、かれらは産業上の態度で分裂していた」。例えば、「結合労働者」から成る「煉瓦職人マンチェスター組合」‘the Manchester Order of Bricklayers’ は「徒弟制度をきわめて重要な制度と考え、徒弟の数を制限し、『その職業の全般的に望ましい状態』の維持のためにリーキッジleakage（自分自身を熟練職人と見なす徒弟を経ていない人びと）を防ぐことを通じての入職を制限するために闘った。」しかし、「会社べったり労働者」から成るロンドンに基礎を置く「専門煉瓦職人組合」‘the Operative Bricklayers’ は、「徒弟の数の問題にも、どんな方法によってであれ入職を制限することにも関心をもたなかった。そのことから、その組合が全体として『その職業の望ましい状態』に関心を示さず、最も安定した幸運な、そして過剰な労働市場に脅かされていると感じなかった部門に関心をもっていたということを導き出すことは理にかなったことであろう。その組合員は雇用主とかれらの関係に関心をもっていた」。

さらにルミスが続けていることを見てみると、「家に壁が築かれると煉瓦職人はもはや要求されず、屋根が葺かれ、壁に仕舞いが塗られるとストレート工と左官は解雇に直面し、(……)それから塗装工と装飾職人は代わるがわる雇用され、解雇された。(しかし一筆者)大工はかれらの熟練が建築作業のほとんどの段階で必要とされるので最も安定していた。全作業を通じて雇われることのできた労働者は、敷地を整備することで始め、かつすべての備品が作業場に戻されるまで要求される他のすべての仕事を続けることができた多部門に有益な不熟練労働者であった。建設業では」熟練は必ずしも「継続的雇用の保障」とはならなかった。「不熟練労働者が、かれらが特殊専門化されず、新しい

契約が結ばれ、熟練職人が再び募集されるまでどんな雑多な仕事でもできたというだけでヨリきわだった安定性を有することができた」。

ルミスはついで「不安定な労働者」として炭坑夫を分析の対象とし、「炭坑夫の安定性は主として所得の不安定である。……しかし労働者階級内での社会成層と、産業的・政治的意識に対するその影響を考慮に入れると炭坑夫を無視することはできない。かれらは特定の地域に集中しているので、他の諸職業グループよりもヨリ強い選挙上の力を有していた。このことがかれらに労働貴族のいかなるグループよりも労働者階級のリーダーシップのためのヨリ大きな潜在能力を与えていた」、として次のように述べている。「ある炭坑夫が労働貴族であるかどうかは労働貴族に関する概念の正当さの何がしかのテストケースとなる。なぜなら、もし炭坑夫が労働貴族でなかったとしたら、そのときかれらの大規模な労働組合運動と政治活動は、非労働貴族がかれら自身のために組織化でき、労働貴族の指導を要求しなかったことを示している。実際かれらは、非労働貴族労働者集団が熟練労働貴族のほとんどよりもヨリ組織化できさせたことの証明になった。さらに自由党の一部としてのかれらの政治的スタンスと、独自の労働党の出現を見ることに気が進まなかったことは、これらの非労働貴族の多くよりもヨリ急進的でなかったことを示している。炭坑業がかなりの割合の労働貴族を含んでいなかったら、かれらの態度と組合は、ある点では、熟練労働貴族形成が非労働貴族のヨリ階級意識のある労働者階級の運動の出現を抑制したいという仮定を論駁することになる。他方、もし、労働組合結成のかれのレベルとかれの稼ぎ高のゆえに、かなりの数の炭坑夫が労働貴族層に組み込まれなければならないとするならば、そのとき労働貴族を規定する基準は、かれらの変動する稼ぎ高、炭坑業への入職の容易さ、そしてかれらの一般的に低い社会的地位を考慮に入れると、かなり混乱するようなものにならないでなければならないだろう。もしかれらが熟練労働者と考えられるならば——あるいはもし採炭夫だけがそのように分類されるならば——そのときかれらが労働貴族として含まれるか否かは、労働貴族形成の原因となる要素としての熟練と労働組合員であることとの間の当然のこととして仮定された相関関係に影響を及ぼすだろう。もっと重要なことには、それは文化的諸態度と諸価値がこのような階層と共存する程度に関するいかなる評価にも徹底的に影響を及ぼすだろう」。

さらにルミスは続ける。「1880年代に至る時期に労働組合を結成するうえでの炭坑夫の成功の詳説がどんなものであろうと、かれらの組合運動は常に」「かれらの状態を改善するための議会立法に期待した」という点などで、職能別組合の大多数のそれとは異なった性質を有し、1880年代末に出現した不熟練労働者の組合の政策とはヨリ多くの点で共通していた」。また「採炭夫がかれらの労働時間、賃金、そして地位において、その労働者集団の他の部分とから区別されていた程度は地方ごとに様々であった。炭坑においては、少年新人炭坑夫は運搬の仕事を通じてトラップ装置の操作から坑内トロコに石炭を詰め込む作業へ、そしてついに採炭作業へと、一連の段階を通じて採炭の仕事に入っていた。この前進は、少年がかれの力の増大とともに種々の仕事に進んでいったので、『技能』‘craft’訓練の問題であるよりもむしろヨリ肉体的発育の問題であった。炭坑では採炭夫が上位の地位と賃金を有していたが、しかしその労働者集団には、多くの職業におけるアーティザンと不熟練労働者との間におけると同じような厳格で永続的な管轄線は存在していなかった。実際に、急速に拡大していた時期には、炭坑に入った未熟練な成人不熟練労働者はほとんど直ちに採炭夫として雇用された。肉体的スタミナが主要な必要条件で、賃金は出来高払いで、老齢と不健康は、採炭作業よりもヨリ大変な労力を要せず、それほど良くない賃金の仕事への後退を必然的伴うかもしれない。だが労働貴族が炭坑夫の間に見いだされるとすれば、それは採炭夫のランクにおいてでなければならない」。

(5)

以上、ルミスによる従来の労働貴族論批判とそれに代る新たなモデルの提示、さらに様々な産業の労働者を分析することによるそのモデルの適用如何をみてきたが、もう一度かれのモデルを見ておくと、それは、「19世紀における実際すべての労働者の主要な問題は雇用の継続を確保することであった」という状況のもとで、雇用主はそれぞれの産業における労働者集団の一部に雇用の継続を保障し、こうして雇用主のインタレストを受け入れる「安定した」「会社べったり労働者」の集団をつくり、それぞれの産業の労働者集団を分裂させ、経営の安定を図る」、という理論であった。そして機械工、港湾労働者、ガス労働者、醸造労働者、そして郵便局員それぞれの労働者集団のなかに「会社べったり労働者」の集団がつくられ、それぞれの労働者集団が分裂されたことがこの理論によって説明されている。しかし鉄道従業員、建築労働者、炭坑夫のそれぞれの労働者集団については、この理論は適用されていない。鉄道従業員に関しては、かれら全体が「安定した労働者」であった理由としては、「ひとつには、それ自身の賃金と昇級階梯をもつ数多くのグレードをもったところの経営者が押し付けた雇用構造」が指摘されているが、それだけの指摘では、なぜ鉄道従業員全体が会社に対する忠実さを強くもち、純粋に自分の仕事に満足していたのかということの説明にはなっていない。しかも経営者による漸次的な労働強化、賃金の引き下げ、技術的改革の導入といった政策によって、「『結合労働者』の憤りと階級意識を最も発展しがちなグループ」の形成が説明されるだけであって、鉄道従業員という労働者集団の分裂については何らの説明もされていない。また建築労働者に関しては、ルミスが受け入れることを拒んだ労働組合による労働貴族の形成が語られ、「会社べったり労働者」と「結合労働者」の用語が出てきても、建築労働者がそれぞれの労働集団に何故分裂させられたのかという説明はなされていない。炭坑夫にいたっては、「採炭夫がかれらの労働時間、賃金、そして地位において、その労働集団の他の部分とから区別されていた程度は地方ごとに様々であった」、ということが指摘されているだけである。

ところが、機械工、港湾労働者、ガス労働者、醸造業労働者、郵便局員それぞれの労働者集団がそのなかに「会社べったり労働者」の集団がつくられ分裂したということは、ルミスの提示したモデルで説明されていると述べたが、しかしそのさい、かれはそのモデル理論を指摘するだけで、それぞれの雇用主が経営の安定を図るために、なぜそれぞれの労働者集団のなかに「会社べったり労働者」の集団をつくって、その集団を分裂させたのか、という詳細な説明はされていない。おそらく考えられるとすれば、ルミスは雇用主の労働者集団への対応について何らの実証もしていないからであろう。かれにとってはかれのモデル理論ははじめから仮説ではなく、何らの証明もいらない公理であったようだ。そしてルミスの研究のひとつの特徴は全体として実証不足であるという点に求められよう。

ついでながら、チャールズ・モアルによるルミスの『労働貴族1851～1914年』に関する批評⁽¹³⁾のなかでの批判的諸点を紹介しておこう。モア曰く、「『安定した』職業がどの程度安定しているのかということに関する測定はほとんどない。われわれは……安定した仕事における他の労働者の割合について全然わからない。そしてわれわれは、ルミスがいつていることにもかかわらず、かれの時期(1851-1914年-筆者)に状況が変化したのかどうかということに関して全くわからない」。「ルミスにとっては……安定さの……重要な意味は、それが労働者をヨリ穏やかにすることによって雇用集への態度を変えたということであるが、これは実証するにはヨリ困難である。19世紀と20世紀初頭は、安定さにおいて衰退はなかったとはいえ、少なくとも鉄道における昇進見通しの縮小を見、そしてこれは労働組合結成と戦闘性における高揚と関係しているというルミスの主張は全くもったもらしい。しかし……機械業における安定さの減衰に関する信頼できる証拠はほとんどなく、かつその反対のことが起ったということを考えるある程度の理由はある。さらに、たとえ一定の安定さは雇用主との良

い関係を維持しようとする希望を促進させ、こうして戦闘性を挫くだろうということ、そして不安定さは反対の結果を招くだろうということを考えがちになるとしても、それは自明のことではない。安定さはまた、組合結成、すなわち組合に加入し、それを維持するうえで安価で容易な決心の固い労働者集団を導く諸条件を促進することができ、そして組合結成は戦闘性と同等ではないが、しかしそれは効力ある戦闘性の前提条件である。不安定さは効力ある戦闘性にとって不利な諸条件、すなわち絶望と沿価値状況を促進することができる」。

以上はルミスの研究に対する批判であるが、それにもかかわらず、ルミスの研究には無視することのできない内容がある。それはひとつには港湾労働者、ガス労働者、醸造業労働者、ポストマン、建築不熟練労働者といった労働貴族ではほとんど分析の対象とならなかった不熟練労働者について分析している点である。港湾労働者に関しては、かれらを「常勤労働者」、「抜擢労働者」、そして「臨時雇用労働者」に分類し、それぞれの労働者の特徴を分析し、不熟練労働者である港湾労働者のなかにも以前アーティザンであった者が多数存在していたことを明らかにしている点は、1889年のドック・ストライキや港湾労働者による労働組合結成を理解するうえで貴重な示唆を与えてくれているようであり、また熟練労働者のなかから不熟練労働者が創造される今までは知られていなかったプロセスをわれわれに示してくれている。またポストマンの創造も、今までほとんど知られていなかった熟練の分解によることなく、人為的に不熟練労働者が生みだされるプロセスを明らかにしている。そして建築不熟練労働者が建築労働者のなかで「ヨリきわだった安定性を有する」労働者であったという点は、建築労働者の労働運動を分析するうえで重要な役割を果たすものと考えられよう。

以上のように、ルミスの研究は、19世紀イギリス労働史研究では、われわれにとって貴重となると考えられそうな内容と示唆を含んでいるが、ルミスがこうした成果を生み出すことができたのは、かれが「規則性と保障」という概念を分析手段としたからである。そしてルミスのこの分析手段を使って得られた最大の成果は、上述の批判を考慮に入れたとしても、多くの産業のそれぞれの労働者集団が不熟練労働者集団であれ、熟練労働者と不熟練労働者の両者による集団であれ、いずれにしても安定した「会社べったり労働者」の集団と一定の不安定性をもった「結合労働者」の集団との形成が主張されていることである。とすると、19世紀イギリス労働者階級の分析では、労働貴族論はもはや役には立たなくなったということになるのであろうか。確かに、「会社べったり労働者」、すなわちルミスがライトの『偉大なる下層民』での「教育ある労働者」の分析に基づいて描いた「教育ある労働者」像は雇用主のインタレストの代弁者とも解釈できないことはなく、それはレーニンの労働貴族論に基づいて記述されたフォスターの労働貴族像に、その分析の仕方は異なっているにしても、類似しているといえる。したがって、ルミスの「会社べったり労働者は」、ホブズボウム、グレイ、そしてクロシックによってその性格を特徴づけられたブルジョア・イデオロギーにストレートに浸潤されることのなかった労働貴族像とは異なっている。しかしライトによる「教育ある労働者」に関する分析には、ルミスの触れていない記述があって、それは、「教育ある労働者」は「少なくとも平均的な知的能力を有するだけでなく、時代の進歩に遅れずについてきている、よく読書をする博識の社会の成員であり、階級的インタレストを有する」労働者であって、「かれは他の労働者（「知性的アーティザン」－筆者）からは……かれらが必要とするすべての文書を起草し、それらに係わる諸問題では指導的役割を果たすことが期待されているのである」、という記述である（傍点は筆者）。このことを考慮に入れると、「教育ある労働者」像はホブズボウム、グレイ、そしてクロシックの描く労働貴族像に類似してくる。しかもルミス自身が「……ヨリ一般的に職工長、組長、あるいは出来高親方として他の人びとの労働を支配する権力は、雇用主のインタレストに従って行使される権力としてとらえられてきた」が、「そうした理解は誤りである」、といているのである。したがって、ルミスの「会社べったり労働者」に関する理解は一定の矛盾を呈しているといえよう。

しかしそれはともかくとして、前述のルミスの主張は、熟練労働者のなかにも不熟練労働者のなかにも少なくとも「安定した労働者」の集団が形成されることを明らかにし、そうすることによって従来の労働貴族研究で主張された労働貴族と不熟練労働者との間に設けられた溝をかなりせばめ、労働貴族が下層労働者にヨリ容易に影響を与えることができたということを示唆してくれている。ところがルミスは次のようにいっている。「私のモデルは、その対極に一方では労働貴族に関するマルクス主義的イメージと、他方ではベリングが労働貴族のなかに見出したヨリ戦闘的例に相当する2つの典型的タイプをもつひとつの連続体に、異なったタイプの行動を据えることを許容するであろう。これらを私は『会社べったり労働者』と『結合労働者』と、そして、あるいは『労働貴族』と『准労働貴族』と命名する」。このことがルミスの研究で成功しているというのは疑わしいが、それはともかくとして、前述の繰返しになるが、ルミスは「会社べったり労働者」を「労働貴族」といってもいいといって、「労働貴族」の用語を使い、そしてまたすでに見たように建築労働者に関する分析では労働組合による労働貴族の形成を語っている。なるほどルミスは、「私の結論は労働貴族の概念はあまりにもひどい欠点があるので、それは修正されるべきか、あるいは廃棄されるべきである」といっているが、ここにルミスの逡巡を垣間見ることができないであろうか。かれは「廃棄せよ」とは断定しかねているのである。おそらくそうであるがゆえにかれは、かれの著書の題名を『労働貴族1851-1914』としたのではなかろうか。しかしルミスの研究を検討した著者がここでいいたいのは、ルミスが批判するように従来の労働貴族研究にも、ルミスのモデルにも不十分な点が多々あるようなので、とりあえずは労働貴族論とルミスのモデルには捕われずにそれぞれの長所を生かしながら、さらに多方面から19世紀イギリス労働者階級の分析を行なう必要があるのではなかろうかということである。

(6)

グレイとクロシックは、労働者階級の社会成層の分析では、例えばひとつには結婚と住宅を分析の対象として労働貴族層の形成を明らかにしようとしているが、ルミスは以上のようにいって、かれらによる労働貴族層の形成を批判している。クロシックは、「1850年代から1870年代にかけてかれらの父親が熟練労働者であるすべての新郎の約3分の1は同様の家族、あるいはヨリ地位の高い非肉体労働者の家族の出身の娘と結婚し、それに対してその父親が不熟練労働者である新郎の3分の1だけが同じような結婚をしていた」ことを明らかにし、グレイは、「1860年代には熟練労働者は最も頻繁に他の熟練労働者の娘と、そして不熟練労働者の娘との結婚よりはもっとしばしば中産階級の下層出身の娘と結婚していた」ことを明らかにしているが、クロシックの「このような間接的手続は、労働者階級の階層、あるいはそれらの間の距離を考察する最良の方法として推賞することはできない」し、そしてグレイは、「たとえ9つの熟練職業を選んでいるにしても、不熟練労働者のサンプルとしては建築不熟練労働者と運搬人しか用いていない」し、「1890年代までにアーティザンは、従来よりも中産階級の下層との結婚のヨリ低い比率と、その2つの不熟練職業とのヨリ高い結婚比率を経験していた」。また、「労働者階級内の社会的区分の表示として居住パターンを分析する試みがなされているが、それも結婚による区分と同様の困難に直面している」。「ロンドンではヨリ低い賃金の規則正しく雇用されていた不熟練労働者がしばしばヨリ高い賃金を得ている多くの熟練労働者よりもヨリ良い住宅に住んでおり」、また「最悪の住宅にさえ熟練労働者と不熟練労働者がかなりの割合で混住していた」からである。そしてこのことはまた、「熟練」が「社会成層の主要な決定因」にはならないことを示している。

また、労働者階級の社会成層の分析に関してルミスは次のようにも述べている。「グレイとクロシックの両者は社会的アイデンティティと諸価値に関心を払い、『処理された』、'negotiated' ブルジョ

ア諸価値を用いている。私は労働者階級がいかなる自然発生的な仕方でも中産階級の諸価値を採用することはなかったということには同意するが、しかし謙虚な節儉、家庭的安楽、家庭中心の生活、趣味などが、なぜ第1にブルジョア的価値であると考えるのが当然であるのかという理由を知ることができない。明らかにそれらは職業の収入と保障のレベルに応じてより容易に達成された。しかしこれらの諸目的は、高賃金の労働者集団と同様に低賃金の労働者集団の諸部分によっても望まれ、達成されさえした。「低賃金に基づく一定の家庭的安楽と安定を達成することは、夫婦の両者による一定の禁欲と家庭中心の生活を要求していた。かれらは、それら諸価値の占有の指標として現在用いられている、それらの節儉的、教育的、そして自発的な諸組織に所属することはできなかった。社会的『リスパビリティ』はいかに獲得し、維持するのに困難であっても、個人的、家族的、そして全住民参加の価値の意味を提供しており、そして労働者階級内における上級の経済的階層に価値に関するこの文化的意味を限定した明白な機構はないのである」。

また、「熟練諸階層間の結婚、あるいは住居パターンに関する資料が重要であるとすれば、家族規模の問題はライフ・スタイルにとってはより決定的である」。「家族規模は一般に縮小し、その家族規模の縮小は中産階級から始まって、社会的階級に下降拡散したと論じられてきた。その場合、労働貴族の概念に従うと、熟練労働者がこの傾向に応じる最初の職業グループになったのかもしれない」。しかし「労働者階級の家族規模の縮小は鉄道労働者において最も急であり、そして低賃金の運搬人の間で何よりも最も急激であった」。そして「社会成層の大きな重要さは、人びとの大多数が上方への移動を熱望したという仮定に依っている」が、クロシックに従うと、「労働者階級から人を引き出すという社会的移動は、かれが研究した労働貴族の一般的目的ではなかったのである」。

では、労働者階級の社会成層は何故なる要因によるのであろうか。ルミスは、「労働者階級の社会成層が理解されうるとすれば、家族とコミュニティと歴史的経験により注意を集中しなければならない」、と述べている。そして「歴史的経験」については次のように述べている。「19世紀において学校教育を受けることなく仕事を始めた両親は、12歳、あるいは14歳までかれらの子供たちが学校に通っているのを見ている。たとえ貧しくとも、住宅はゆっくりと改善され、通常の人口の健康もまたそうであった。労働時間は短縮され、職業病と労働災害の不快な叩きの鐘の音は減少した。病人や老人の扱いはそれほど冷淡でなくなり、限定されていたとはいえ、健康保険や失業保険と同様に老齢年金が導入された。全体として19世紀の都市労働者階級のすべての階層が、かれらの物質的環境における改善を見ることができたということは疑うことはできない」。

また「コミュニティ」に関してはこう述べている。「社会意識——階級と階層の——は暮らしの経験から生じ、子供たちはかれらが職場に入るずっと以前にかれらの階級的立場をよく知っていた。実際にかれらは、職につくまえにかれらの家庭的諸価値を経験していた」。また「労働者階級が最も自由にそれ自身の諸価値を表現し、それ自身の世界を創造できるのは産業以外のところであった」。また「労働者階級がそのメンバー間で気前の良い（支払いのない）諸サービスの習慣を保持していたという事実はイデオロギー的に重要であった」。そして「これらの諸サービスは非公式に家族、友人、そして隣人を通じてなされた。このようなコミュニティと近隣の諸システムが婦人によって確立され、管理されていたという証拠は圧倒的である。もし労働者階級内で重要な社会成層がなされたとすれば、それは主として婦人の諸活動を通じてなされてきた。誰が尊敬されうる者であり、誰とつきあい、誰を援助するかということ、そして子供たちの行儀の程度を決めるのは——そしてこれらの事柄を通じて近隣の全雰囲気を決めるのは婦人であった」。

こうしてルミスは、労働者階級の社会成層で最も重要な役割を果たしたのは婦人であったことを強調しているが、この婦人の重要な役割に関するルミスのより一層の分析を見る前に、ルミスによる家族の諸要素の分析を見ておこう。「より高い賃金を得ている『労働貴族』の社会的イメージの一部は、

かれらが家族外で（……）かれらの妻を働かすことを許さなかったことである」といわれているが、「家族をある生活水準から他の生活水準に引き上げる決定的余得は、他の家族のメンバーの寄与であり、そしてそれは、次には主としてその地方の諸産業の混在……に依っていた。そして既婚女性が家庭外で働くか否かは地方ごとに著しく異なっていた」。1901年のサンセスによれば、かの女たちの役割はプレストンで30.1パーセントであったのに対して、バローでは6パーセントでしかなかった」。というのは、「プレストンは本来婦人が仕事をする機会の豊富な綿業都市であり、かの女たちは結婚以前にも以後にも働いており、他方バローは本来、たとえ女たちが望んだとしても婦人の働く機会のほとんどない重機械工業と造船業の町であった」からである。「労働者の所得を論じるさいに」「重要なのは常に家族所得である」。また「『労働貴族』や、あるいは他の種類の地位を評価するさいには、単なる週所得、あるいは年所得さえよりも、生涯収入を考察することが基本である」。「もし例えば鉄鋼労働者が16歳で仕事を始め、50歳で健康で衰えるまで週平均賃金約2ポンドを得ていたとすれば、かれの生涯収入は統計で約3,500ポンドになるであろう。14歳で働き始め、65歳で退職し、しかし平均週賃金1ポンド35セントしか得ていなかった鉄道従業員は3,600ポンドの生涯収入を得て、少しはより良い稼ぎをしたことになるかもしれない。……多くの地域では低い賃金は、より安い家賃、より良い健康、より良い環境、そして妻や子供たちのためのより多様な機会で捕われたかもしれない」。

さて、労働者階級の社会成層における婦人の役割であるが、ルミスはまず始めに、「労働者階級の父権社会は、かれらの上の諸階級のそれとはむしろ異なった現象である。父権社会内の労働者階級の女家長の慣習の持続性は婦人の力を実証している。婦人はかの女たちの夫の名前をとっていたかもしれないが、しかし、かの女の家族網のためにかれの家族網を見捨てるのは、しばしば夫の方であった」と述べ、さらに次のようにいっている。「ロバーツ⁽¹⁴⁾の160人の被調査者のうち1人の男性だけが家政をコントロールしており、そして財布のコントロールし、普通転居を決めるのは婦人であり、家族が家を買うことができるかどうかを、あるいはかれらがより高い家賃を払うことができるのか、あるいはより低い家賃を払う必要があるのかということを決めるのはかの女であった、ということの意味していた。子供に影響を与える領域、すなわちかれらが何所にどのように住むのかということ、礼儀とテーブル・マナーの習慣、かれらの『自分よりすぐれた人たち』に対するかれらの尊敬、教育、あるいは宗教における婦人の傑出した力は、母親たちをかれらの階級の諸価値を形成するさいの真の権力者にしていた」。また「優越superiorityとリスペクタビリティに関するいかなる労働者階級的意味は、職場における男性の地位からよりも、コミュニティにおける家族のふるまい、地位、そして社会諸関係からより強く生じていた。ほとんどの労働者階級に対する尊敬とヒエラルキイは、金銭がいかに稼がれるということよりもむしろ金銭がいかに消費されるということから生じていた……『リスペクタビリティ』は、熟練男子労働者の労働に基づくイデオロギーに関係すると同じように、女性のイデオロギーと慣習にも関係していた」。

なおここでたびたびリスペクタビリティに関する指摘がなされているので、それに関するルミスの別の記述も紹介しておこう。かれ曰くに、「リスペクタビリティは家庭による企てによった」。「私自身の見解は、労働者階級におけるこのような家庭中心のリスペクタビリティは、安定した職業の成長に比例して成長してきたということである。労働貴族、特に手工業の経験から生まれたかれらは、かれらの強力な職場での社交と労働組合の会合を通じて、かれらを正規の諸組織と公共的活動に引き入れたところの家族外の社会生活を有していた。しかし多くの安定した労働者は労働組合員ではなく、そしてかれらのグレートと雇用を保持するための場での社交を必要とはしなかったのである」。

以上はルミスによる産業外のコミュニティにおける労働者階級の分析であるが、ここで指摘されている居住パターンで労働貴族層の形成を見るうえでの困難さ、「謙虚な節儉、家庭的安楽、家庭中心の生活、趣味など」が低賃金労働者によっても「望まれ、達成されさえした」という点、労働者階級

分析における家族規模の程度の重要性、19世紀における都市労働者階級の物質的環境における改善、労働者の所得を見るさいの家族所得と生涯収入の重要性、そして何よりもコミュニティにおける婦人の役割の重要性は、今後の労働者階級の分析では無視することのできない指標となるであろう。しかしにもかかわらずここで問題となるのはコミュニティにおける婦人の役割の程度である。ルミスは、婦人がコミュニティにおける労働者階級の「諸価値を形成するさいの真の権力者」であるといっ、コミュニティの在り方を決定するうえでの婦人の決定的役割を強調しているが、果してそうなのであろうかという疑問を払拭することはできない。そしてそれと関連してルミスは「労働者階級が最も自由にそれ自身の諸価値を表現し、その自身の世界を創造できるのは産業以外」のコミュニティにおいてであったと主張しているが、この点に関しても疑問を禁じえない。もしルミスのいうことが正しいとすれば、それでは何故かれが労働貴族論に代るモデルまでつくって、諸産業における労働者集団の分析に力を入れたのかということが何の意味ももたないことになってしまうであろう。事実かれらは、コミュニティにおける労働者階級の分析では、「労働者階級におけるこのような家庭中心のリスベタビリティは安定した職業の成長に比例して成長してきた」ということを指摘しているだけで、かれのモデルによる諸産業における労働者集団の分析の内容は、コミュニティにおける労働者階級の分析にはほとんど反映されていない。もしルミスが諸産業における労働者集団の分析とコミュニティにおける労働者階級の分析を有機的に結びつけていたとすれば、おそらくもっと優れた成果を得られたのではなかろうか。

ところで、ルミスは、コミュニティにおける労働者階級の分析では、労働者階級の社会成層を重要な課題としていたが、しかしそこでのかれの論議から労働者階級が如何に階層区分されたのかということ具体的を知ることはできない。むしろかれの議論は、労働者階級の階層区分はあまり重要な意味をもたないことを強調しているかのような印象を与えている。実はルミスは序文で次のようにいっている。「私は、労働者階級内の諸階層の性質や重要性がどのようなものであろうと、かれらが同じ国の市民として中産・上流諸階級と共有するアイデンティティよりも、もっと強いアイデンティティに関する共有意識をもった『労働者階級』the 'working class' (単数であることに注意—筆者) と呼ばれるひとつの社会編成があったという広く行き渡った仮定から出発する」。おそらくそうであるがゆえに、かれは、労働者階級内の熟練労働者にも不熟練労働者にも「会社べったり労働者」、あるいは「安定した労働者」の集団の形成されたことを強調しているのではなかろうか。このことは、従来の19世紀イギリス労働貴族研究はあまりにもリジッドな階層区分をしているのではないかということを示唆しているように思われる。確かにすでに述べたように、ルミスによる諸産業の労働者集団の分析は労働貴族と不熟練労働者との間に設けられた溝を狭くしてしてくれている。

しかしルミスは、コミュニティにおける婦人の決定的な役割を強調しているにもかかわらず、不思議なことに、19世紀イギリスには多くの職業婦人が存在していたのに、諸産業における労働者集団の分析では婦人はほとんど登場してこないのである。おそらく「会社べったり労働者」、あるいは「安定した労働者」という概念がそうさせているのかもしれない。とすれば、確かにルミスが強調しているように、従来の19世紀イギリスの労働貴族研究ではほとんど婦人労働者の動向が無視されているで、従来の労働貴族論とも、それに代るルミスのモデルとも違ったアプローチの仕方が要求されていることになるであろう。しかしそれはともかくとして、ルミスの研究は、19世紀イギリス労働者階級の研究に様々な貴重な内容、論点、そして示唆を与えてくれるものであると評価できるのではなかろうか。

(注)

- (1) E.J.Hobsbawm, 'The Labour Aristocracy in Nineteenth-century Britain' (1954), in do, *Labouring Men : Studies in the History of Labour*, 1964. (「19世紀ブリテンにおける労働貴族」(1954)、鈴木幹久・永井義雄訳『イギリス労働史研究』、ミネルヴァ書房、1968年)。
- (2) 19世紀イギリス労働貴族研究批判に関しては、拙著『イギリス労働貴族—19世紀におけるその階層形成』、ミネルヴァ書房、1988年の1の4「19世紀イギリス労働貴族研究批判」を参照のこと。
- (3) Trevor Lummis, *The Labour Aristocracy 1851-1914*, 1994
- (4) レーニン「資本主義の最高の段階としての帝国主義」、『レーニン全集』第22巻、大月書店、レーニン「帝国主義と社会主義の分裂」、『レーニン全集』第23巻
- (5) 前掲論文の他に次のものを参照のこと。'Trends in the British Labour Movement since 1850' (1949/63) in do., op.cit. (「1850年以降のブリテンの労働運動における諸傾向」、鈴木幹久・永井義雄訳『イギリス労働史研究』)；'Lenin and the "Aristocracy of Labour"', *Marxism Today*, July 1970 (「レーニンと労働貴族」、斉藤孝・松野妙子訳『革命家たち——同時代的論集——』、未来社、1978年)；'The Aristocracy of Labour Reconsidered' (1978) in do., *World of Labour: further studies in the history of Labour*, 1984；'Debating the Labour Aristocracy' (1979) in ibid.；'Artisans and Labour Aristocrats?' (1983), in ibid.
- (6) John Foster, *Class Struggle and the Industrial Revolution*, 1974；'British Imperialism and the Labour Aristocracy' in Jeffrey Skelley(ed.), *The General Strike*, 1926, 1976
- (7) R.Q.Gray, 'Styles of life, the "Labour aristocracy" and class relations in late nineteenth-century Edinburgh', *International Review of Social History*, XV III, (3), 1973；'The Labour Aristocracy in the Victorian Class Structure' in F.Parkin(ed.), *The Social Analysis of Class Structure*, 1974；'The Political Incorporation of the Working class', *Sociology*, 9, (1), January, 1975；*The Labour Aristocracy in Victorian Edinburgh*, 1976；'The labour aristocracy: comments on the recent debate', *Bulletin of the Society for the Study of Labour History*, (XL), 1980；*The Aristocracy of Labour in Nineteenth-century Britain, c. 1850-1914*, 1981
- (8) G.Crossick, 'The Labour Aristocracy and its Values; A Study of Mid-Victorian Kentish London' *Victorian Studies*, 19 (3), March 1976；*An Artisan Elite in Victorian Society*, 1978
- (9) Henry Pelling, 'The Concept of the Labour Aristocracy' in do., *Popular Politics and Society in Late Victorian England*, 1968
- (10) S.and B.Webb, *The History of Trade Unionism*, 1919 荒畑寒村監訳、飯田鼎・高橋洸訳『労働組合運動の歴史』上巻、日本労働協会、1973年)
- (11) The Journeyman Engineer (Thomas Wright), *The Great Unwashed*, 1868
- (12) A Working Man, *Working Men and Women*, 1879
- (13) Charles More, 'The end of the Labour aristocracy?', *Labour History Review*, vol. 60, Part 1, 1995
- (14) E.Roberts, *A Woman's Place; an Oral History of Working-class Women 1890-1940*, 1984

